

・研究発表2.「創造的な活動としての音楽と動き」

— 感情のイメージを出発点として —

塩原 麻里  
(東京学芸大学)

発表内容要旨

ダルクローズのリトミック教育に影響を受けた音楽と動きのアプローチは、主に幼児教育において根付き、様々なかたちで発展してきた。初等教育においては、学習指導要領の表現領域において、6年間を通して身体表現を取り入れていくことが明記されている。中等教育においてこれらは、指揮による身体表現、というかたちにつながっていくが、その頃になると、音楽と動きという自由で創造的な活動であるはずのものが、既成曲を学ぶための一つの道具として使用されるようになっていく。あるいは、音楽教育から離れて、体育科において既成曲のイメージに基づいて生徒たちがつくる創作ダンス、といったような内容に姿を変えて行く。

このように継続性のない音楽と動きの経験は、生徒の側に立てば、幼児期に経験した音楽を身体全体で楽しみ、直接的に理解するという有意義な活動が、成長と共に次第に記憶の底に追いやられていくことを意味している。ジャック＝ダルクローズはリトミック教育を、幼い子どもたちのみに有益であるとは限定せず、幼い時期から始める必要性があることを強調している。メソッド構築のきっかけとなった、彼のコンセルバトワール時代の逸話を思い起こせば、どのような年代の人たちにとっても、そしてこれから音楽家や音楽教師になろうとしている人たち、あるいはすでにそのような職についている人たちにとっても、身体で音楽に応答する活動が有益であると、ジャック＝ダルクローズが考えていたことは明らかである。

そのような理由から、本研究発表では、音楽を専攻する大学院生という、言ってみればトップレベルの専門教育を受けている学生たちと、音楽と動きの可能性を探ることによって、幼児期から専門教育に至るまでのリトミック教育を展望するきっかけをつかむことを目的としている。そのための一つの試みとして、大学院生たちがリトミックの授業でプロジェクトとして取り組み、続いて舞台上で発表した音楽と動きのパフォーマンスを分析する。このプロジェクトは、4つの感情のイメージからインスピレーションを得て描かれた絵をもとにして、そこから即興的に音楽と動きを同時に作り出していくものである。これらのケーススタディーを通して、既に中学校音楽科教員の経験を積んでいたり、将来音楽科教員を目指しているこれらの学生が、これから音楽と動きの授業を導入して行くにあたって、自らが経験しておくべきことは何か、ということについての示唆も得たいと考えている。